

音楽理論学習におけるeラーニングの活用

ーコースウェアの小テスト使用実践よりー

Use of e-learning in music theory learning:

From practice using test of courseware

小林田鶴子(神戸女子大学)

Tazuko KOBAYASHI (Kobe Women's University)

(キーワード)

eラーニング、音楽理論、保育士・教員養成

1. 保育士・教員養成における音楽理論学習

(1) 音楽理論授業の現状

筆者の勤務する神戸女子大学文学部教育学科では、音楽理論は1年次開講の「音楽科概説」で学んでいる。本講義は、小学校・幼稚園・保育士コースのほぼ全員が履修しており、2クラス同時受講のため、1コマの履修人数は90人程度である。また、本学の入試に音楽は課されていないので、2017年10月に行った調査注1)によると、大学入学までにピアノ等のレッスンを受けた入学生は72.1%であり、27.1%は無し、と回答している。但しピアノ経験者でも1~2年未満が2割ほどあるので、全体的な初心者には50%程度となっている。また初心者の中には全く楽譜が読めない学生もおり、音楽大学を目指して3歳からやっていた学生も在籍することから、音楽的能力差は15年位の経験の差になっている。

こうした音楽的能力差の大きい学生を多人数で一斉講義することは、指導効果を上げる点で、問題が大きいと言わざるを得ない。

(2) 音楽理論の内容とeラーニング

音楽理論の目的は、音楽表現や聴取を豊かにするために、音楽を体系的に学ぶことにあるが、基礎的な内容は、何度も繰り返し学習することによって習得できる項目もある。特に、楽譜が全く読めない学生

に対しては、繰り返して「読譜に慣れる」ことが必要になる。また、諸記号などは暗記することも大切である。こうした、反復学習と個別対応に適しているのがeラーニングである。

2. 音楽理論eラーニングシステムについて

音楽理論でeラーニングを活用した事例の1つとして、筆者が2005年に実施した、WebCTでの活用がある。(注2)この場合は授業内容理解の為に音楽学習支援コンテンツなので、練習問題は少なかった。

そのため、今回は主に練習問題の活用を考え、具体的には、コースウェア“manaba”での小テスト実施による効果を検討した。

実施期間：2019年10月~2020年1月

対象学生：音楽科概説履修者(1年生92人)

実施方法：大東文化大学開発による小テストを利用した学生と利用しなかった学生(同、音楽科概説履修者87人)との、後期テストの成績比較。

これにより、反復練習できるeラーニングの効果が表れていると推察されたが、今後、詳しい分析や、コンテンツの充実を図ることが必要である。

注1)小林田鶴子「教員・保育者養成のための音楽カリキュラムと授業内容の検討」、『神戸女子大学教育諸学』,2018,p.78

注2)小林田鶴子、他「音声を活用したWebCTによる音楽学習支援コンテンツ作成・運用とその効果について」、『名古屋女子大学総合科学研究 創刊号』2007,pp.63-72